平成２１年１月９日

平成２０年度第３学期始業式用講話
～「絆を大切にする」ということ　～

お早うございます。冬休みの期間中に皆さんには大事もなく、今日こうして集うことができました。何よりのことです。

さて、この３学期は、最高学年の皆さんは進路達成に向けて、また、在校生の皆さんは進級に向けて、ラストスパートをかけなければならない学期です。

皆さん一人ひとりが本校に学んでいることへの誇りと自覚をもって、この３学期を乗り越えてくれることを期待します。

ところで、私はこのところ民俗資料や児童文学書を手に取る機会が増えてきました。まるで自分の人生を読み直しているような心境です。先日はフランスの作家サン・テグジュペリの作品、「星の王子さま」を読み返してみました。

すでによく知っている人もあることでしょうが、作者のサン・テグジュペリは、作品の中の「バラ」のモデルとされているサンサルバドル出身のコンスエロ・スンシンと１９３１年に結婚しています。その後、１９４１年１月から２年間、アメリカに亡命しました。「星の王子さま」はこの亡命している間に書かれ、出版されています。大人の童話とも言われるほど、自らの体験に基づいた人生訓が随所にちりばめられた作品ですが、あらすじは概ね次のようです。

砂漠に不時着した郵便飛行のパイロットが不思議な少年に出会います。その少年が独り言のように話す言葉の中から、パイロットはその少年はある小さな星の王子様で、バラとの不和が原因で星を離れ、色々な星を旅した後、地球にやってきたことを知ります。王子は地球で友達になったキツネから「絆を創造する」という表現を学びます。王子の哀愁に満ちた人生。それを知ったパイロット。二人の間に「絆」が生まれますが、王子はパイロットを一人残して星に帰ってゆきます。

「絆」という言葉は、動物をつなぎ止める綱という意味から転じて、「断つにしのびない恩愛」とか，「足かせ手かせになって離れがたいまごころ」等のことを言い表します。

さて、「星の王子さま」の物語の中の一場面です。先ほど紹介したサン・テグジュペリに関する話しを思い出しながら聞いてみてください。

王子が生まれた星に、ある時バラの種が飛んできて、花を咲かせました。この時から王子はバラの花の世話を親身になって始めました。

毎朝水やりをしたり、寒さよけの覆いガラスをかぶせてやったり、風よけをついたてで作ったり、毛虫を取ったりと、出来る限りの世話をしていたのですが、しだいにバラの花に関わるのが煩わしくなってきました。ある日ほかの星へと旅に出かけてしまいます。

ところが、残してきたバラの花が気になってしょうがありません。そんな王子の心の動きを地球で出会ったキツネが次のように解き明かしています。

「あんたが、あんたのバラの花をとても大切に思っているのはね、そのバラの花のために、暇つぶししたからだよ。人間っていうものは、この大切なことを忘れているんだよ。だけど、あんたは、このことを忘れちゃあいけない。めんどうみた相手には、いつまでも

責任があるんだ。まもらなけりゃあならないんだよ。バラの花との約束をね・・・」
「約束を守る」とは「何を大切に考えてどのように行動することなのか」、「絆を大切にする」とは「何をどのようにすることなのか」、「責任を負う」とは？？。
このようなことを考えながら、「先生の約束」という本を読み直してみました。
この本は、もう２０年近くも前に読んだものですが、著者は久米準さん。当時、東京の小学校の先生でした。
久米先生は、ある日何を思ったのか、受け持っている小学２年生の子ども達にとんでもない約束をしてしまいました。いや、自分から一方的に宣言をしてしまいました。
「先生は、君たちがこの小学校を卒業するまでに社会科地図帳に出てくる全ての山に登ります。君たちも自分で問題を見つけて、最後までやり抜く子どもになりましょう」。
言ってしまいました。「君たちも自分で問題を見つけて、最後までやり抜く子どもになりましょう」。
当時の小学校の社会科地図帳に出てくる山は、北海道から沖縄まで２４７もありました。担任している子ども達が卒業するまでの残りは、あと５年間。単純に計算して毎年およそ５０の山に登らなければなりません。また、３６５÷７＝５２．１４２８・・。つまり一年間は約５２週ですから毎週一山ずつ登らなければならない計算になります。
久米先生は土日と夏休み、冬休みを充てて、とんでもない計画を行動に移しました。
プライベートな休日はまずとれない。疲労し、恐怖感や孤独感におそわれながらもたった独りで一山ずつ踏破してゆく。側の者には「勇ましい」と言うよりも、むしろ「凄惨で壮絶」にさえ見える踏破行でした。
久米先生はいつしか「私は何のために登山をしているのだろうか？」、と自問し続け、迷い続けながら山々を駆け巡るようになっていました。
「こんな約束をするまでは登山が大好きな自分だった。今は子ども達との約束を果たすためだけの目的で登山しているような気がする。大げさな約束をするんじゃあなかった。軽率だった。登山なんて時代遅れの人間のすることではないのだろうか。カネと時間を使って、こんなつらい思いをするより、家にいてテレビを見ながら冷えたビールを飲んだり、読書したりする方がずっといい。相手はたかが子どもではないか。今にきっと忘れるんだろうに・・・」
実際、子ども達からも、「先生、約束はもういいよ」と思いやりの声が聞こえてきたりも、するようになりました。
しかし、やめることはありませんでした。
ついに、最後の一山の山頂に立った。大日ヶ岳１７０９ｍ。リュックの中からコップを二個取り出して、御神酒代わりの水を注いだ。一つはクラスの子ども達の名簿の前に置き、一つを我が手に持って山頂で乾杯。いつの間にか涙があふれていた。
これまでは久米先生の「惑いの踏破行」も『キツネが解き明かす「王子さまの心の動き」について』も、別々の本に書かれている別々のこととして読み流していたに過ぎませんでしたが、こうして２つの作品を並べて鑑賞してみると、「なるほど」と納得がゆきました。
「あんたが、あんたのバラの花をとても大切に思っているのはね、そのバラの花のために、暇つぶししたからだよ。人間っていうものは、この大切なことを忘れているんだよ。だけど、あんたは、このことを忘れちゃあいけない。めんどうみた相手には、いつまでも

責任があるんだ。まもらなけりゃあならないんだよ。バラの花との約束をね・・・」

自らの体験を振り返りながら、サン・テグジュペリがキツネの姿を借りて、「人間どおしのつながりの基本は絆を創ることなんだ。できた絆は本気で大事にしなければいけないよ」と教えています。

年齢性別に関係なく、相手を自分と同等な存在としてしっかりと認めること。このことによって生まれた絆は、そのままでは極めてもろいものであること。絆は互いが誠意を持って育てなければ強くはならないものであること。互いの努力で育てあげた強い絆は、いつの時であっても互いの心を豊かにし、なごませる、確かな灯火であること。

久米先生は辛い「惑いの踏破行」の中で、きっとこのようなことを実感されたことでしょう。

「人に信頼される人」の具体のありようの一つは、「絆を本気で大切にする生き方をしている人」であると言えるのではないでしょうか。

今日はここまでにしておきます。

終わります。